

平成二十九年（二〇一七）三月二十五日発行
『大倉山論集』 第六十三輯 抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

秋山大と大倉精神文化研究所

星
原
大
輔

秋山大と大倉精神文化研究所

星 原 大 輔

目 次

はじめに

一 研究所入所前の秋山大

(一) 秋山大の家庭環境

(二) 研究所入所前の動向

(三) 研究所入所の背景

二 研究所在職中の秋山大

(一) 勤務形態

(二) 研究活動

(三) 沿革史資料から見る秋山大とその周辺

(四) 研究所辞職の背景

おわりに

キーワード

秋山真之 稲生真履 鷺尾順敬 西田長男 宗教美術

はじめに

神道研究の第一人者であつた西田長男は、著書『日本神道史研究』第二巻の冒頭で、以下のように記している。

わたくしは、来しかたをかえりみて、いつもよい師友にめぐまれたのをありがたく思っているものである。わたくしは、学窓を出て、直ちに大倉精神文化研究所に入所した。そこには秋山大氏（みづ）という日本仏教美術史専攻の俊秀がいた。彼は司馬遼太郎氏の大作『坂の上の雲』のモデルの一人の秋山真之提督の長男で、伯父には、やはり、そのモデルの一人の秋山好古將軍がいた。また、この小説には彼のこともいくらか出てくるのである。そういう血統もあるのであらう、わたくしは彼ほど頭脳明晰な人はいまだかつて接したことがないように思う。わたくしは、彼からいろいろと大和の古仏についての専門的な知識や見方やなどを教えられた。わたくしのこの「日本宗教の発生序説」の二編は、もしも彼の親切な指導がなかったならば、とうてい、ものにはならなかつたであらう。^①

ここに出てくる秋山大が大倉精神文化研究所に在職していたことは、平井誠二「シリーズわがまち港北第一四四回坂の上の研究所―日露戦争と港北区―」^②ですでに紹介されている。しかし彼の父・秋山真之の経歴については贅言を要さないのに対して、彼はその名前すら知られていないのが現状である。真之の伝記研究においてもあまり触れられることはなく、平成一六年（二〇〇四）刊行の田中宏巳『秋山真之』でも、

長男大は僧侶になり、宗教や精神の問題に強い関心を持っていた父の血を引き継ぎ、日本の宗教史を研究して、『古代発見』『現世信仰の表現としての薬師造像』等の作品を発表している。あとの三人は会社員になり、誰も軍人の道に進まなかつた。^③



【図①】秋山真之遺族。前列右から、母すゑ、長男・大。後列右から四男・全、長女・少子、次女・宣子。左上円内は、三男・中。（秋山真之会編『秋山真之』（秋山真之会、昭和8年）より転載）

という記述にとどまっている。ところが今春、坂の上の雲ミュージアムの調査申請^④を受けて本研究所内の沿革史資料を渉猟したところ、秋山大関係の資料が新たに確認され、さらに他機関が所蔵する関連資料等の存在もわかり、彼の経歴について新しい史実がいくつか判明した。

そこで本稿では、秋山大の足跡や彼を取り巻く人間関係、大倉精神文化研究所における活動実績など、今回明らかになった情報を整理して紹介したい。秋山大の生涯を明らかにすることは、彼個人だけではなく、父・真之の実像に迫る上でも、また本研究所の沿革史を知る上でも重要であろう。

なお、本稿で書簡等の原資料を引用する際には、適宜句読点と濁点を施した。

一 研究所入所前の秋山大

（一）秋山大の家庭環境

まず、秋山大が本研究所に入所する前の動向について整理していきたい。

秋山大は、日露戦争後の明治三十九年（一九〇六）三月八日、父・真之と母・すゑの長男として誕生した。弟妹には、次男の固（明治四〇年五月生）、三男の中（明治四一年五月生）、長女の少子（明治四三年五月生）、四男の全（大正二年八月生）、次女の宣子（大

正五年（一月生）がいる。真之の子供たちの命名には、次のようなルールがあったという。それは、第一に「簡単な旨として一字名」とすること、第二に「子供が幼時からでも自分の名だけは書き覚え易いようにと、出来るだけ画の少ないもの」とすること、第三に「シリメントリー、即ち左右同形の文字」とすることであった。^⑤真之は忙しい事務の傍ら、子供たちとよく遊んだり、自ら馬の絵を画いてやったりしていたという。

昭和八年（一九三三）に刊行された秋山真之会編『秋山真之』で、秋山大の現状について「日本宗教及び宗教史を研究し著述に従事す」と記されている。^⑥彼がこうした研究を志すようになった背景には、父・真之の存在がある。真之が晩年、様々な宗教団体に関わり、とりわけ大本教に入信したことはよく知られている。秋山大はこの事について、左のように語っている。

父は社会人若しくは国家の一員としての仕事は、何といっても軍人として働いた仕事でありませうが、父自身の為めの仕事として父が畢世の力を傾けたものは、此の宗教の問題です。宗教問題に対してはもつと何か深いもの――霊界の何物かを探らうといふ考が深いやうでしたが、併しさうした真理発見の為に父の悩みは殊のほか大きかったやうです。ですから父の生涯を通じて、さういふ問題に無反省の前半生よりも晩年の十年ばかりの間悩み続けて来た間が、父が人間としてむしろ意義ある時代ではなかったかと思ひます。これは世間の観察とは正反對のやうですが、或は父の氣持をハッキリ知つてゐる私、また父から宗教に導かれた私だけが言ひ得る言葉なのかも知れません。^⑦

ここに「父から宗教に導かれた」とあるように、真之は息子に宗教世界への道に進んでもらいたいと、強く願っていた。前掲『秋山真之』には、次のような逸話も記されている。

或日將軍〔秋山真之、以下（ ）は筆者補足〕が大氏を石龍子〔五代、性相学の祖〕のもとに伴つた時、石

龍子は大氏の骨相を観て、「此人には敬神の念がない」と言ったので、将軍は愕然としてそれ以来大氏の心に敬神思想を扶植する事に力め、暇があると市内外の各所の神社に大氏を連れて参拝し、専ら神に祈る途を教へたといふ。⁽⁸⁾

また真之が大正七年（一九一八）二月三日深夜に危篤となり、近親者のみが枕頭に揃った際には、親子の間で次のようなやりとりが交わされた。

将軍〔秋山真之〕は先づ長男大氏を顧みて「お父さんは死ぬるんですよ」と極めてものしづかに死を宣し、室内は最も静寂清浄にすることを希望した。夫れからまた大氏に対して遺諭する所があった。「宗教に依る人格の確立と、社会の救済」といふやうな事であつた。⁽⁹⁾

「父の気持をハッキリ知つてゐる」と言い切る秋山大にとって、この「宗教に依る人格の確立と、社会の救済」という理念を追い求めることは、生涯をかけて取り組むべき課題となつていたに違いない。

もう一人、秋山大の思想形成に影響を与えたと考えられるのが、外祖父・稲生真履である。⁽¹⁰⁾ 宮内省御用掛、東京帝室博物館学芸委員などを歴任した稲生は、明治五年（一八七二）に奈良県掛員として正倉院宝物の調査に参加して以降、宝物の保存整理に関わつたり、⁽¹¹⁾ 明治二年（一八八八）五月から実施された近畿宝物調査に参加したりと、宗教美術、特に仏教美術に関する業務に従事した。また書画刀剣の鑑定にも優れていて、真之は義父の影響を受けて刀剣に興味を持ち、わずか数年で鑑定までできるようになったと伝えられている。⁽¹²⁾ 秋山大はこの外祖父を通じて幼少期から宗教美術に触れる機会が多く、また過去の仕事にまつわる逸話も色々と聞かされていた。のちに著書『古代発見』の中で、その内容に言及している。⁽¹³⁾

このように、秋山大が「日本宗教及び宗教史」の研究に取り組むようになった背景には、父・真之の導きと外祖

父・稻生真履の感化があつたことは間違いないであろう。

(二) 研究所入所前の動向

本研究所には、戦前に勤務した研究員や所員の履歴書が多く残されているが、秋山大のものは見当たらない。したがって、研究所に入所した昭和八年（一九三三）八月以前の足取りを正確にはたどれないが、各種の資料から明らかになったことを紹介しておきたい。

第一に、彼の修學歷である。著書『古代発見』のあとがきで、略歴は「専ら独学、傍ら曹洞宗大学に学ぶ」と記されている。曹洞宗大学とは、現在の駒澤大学である。しかし『曹洞宗大学一覽大正一〇年度』⁽¹⁵⁾に収録されている「卒業生」「入学生（中途退学生）」「現在学生」にも、また『駒澤大学学報昭和一五年度』⁽¹⁶⁾第一輯に収録されている「駒澤大学卒業論文論題並氏名一覽」（大正一〇年度）昭和一五年度、「駒澤大学研究生学士会研究發表要目」（昭和四年創設）昭和一六年六月）にも、秋山大の名前は見当たらない。したがって「曹洞宗大学に学ぶ」とあるものの、正式に学籍を置いていたのではなく、現在の聴講生のような身分で図書館等を利用していたと考えられる。なお現時点で、入所前に発表した論文として、「俱舎曼荼羅について」⁽¹⁷⁾（大正一五年二月）と、「謠曲漫筆」⁽¹⁸⁾（昭和四年四月）の二本が確認できている。

第二に、秋山大が師事した、仏教史学者の鷺尾順敬との関係である。鷺尾は仏教史学者の村上専精や哲学者の井上哲次郎らに師事し、明治三十六年（一九〇三）四月に『日本仏家人名辞書』を編纂刊行し、明治四四年（一九一）には仏教史学会を創立し、雑誌『仏教史学』を主宰した。また三上参次の推薦で東京帝国大学史料編纂所の業務にも携わり、『大日本史料』の仏教史料の整理や編纂を担当している。この間、曹洞宗大学・日本大学・大正大学・立正

大学・東洋大学の講師を務め、多くの後進を育成したという。⁽¹⁹⁾ 鷺尾は日本の仏教を北方仏教の一部とする従来の説に對して、東方仏教として位置付けるべきであると主張し、大正一四年（一九二五）から『国文東方仏教叢書』の編纂刊行を始めているが、このうち、第一輯第一〇巻の文藝部下に収録された「謡曲四十番」の校訂註解を、秋山大が担当している。⁽²⁰⁾ したがって、この叢書の編纂刊行が進められていた時期、少なくとも前掲巻が刊行された大正一五年（一九二六）一月には師事していたことは間違いない。

しかし、それよりも早くから師事していた可能性もある。それは、外祖父・稻生が所有していた金峯山上藏王堂の本尊であった宝鏡をめぐって、次のような逸話が残っているからである。稻生は明治七年（一八七四）に大峯山上を見分した際に、官権をもつて内々殿にあった宝鏡を三面持ち帰り、その一面を自宅の庭の祠に祀っていた。⁽²¹⁾ ある時、東京帝国大学史料編纂官であった鷺尾がそのことを知り、稻生から当時の様子を聞き取るために訪れ、そして宝鏡を金峯山寺へ返還するよう進言したという。稻生も同意したが、果たさぬまま大正一四年七月に死去した。その後、この宝鏡は遺族の意向で翌年五月に同寺へ返還され、現在、重要文化財に指定されている。⁽²²⁾ この宝鏡について秋山大は、鷺尾にその存在を伝えたのは自分で、返還までの段取りをつけたのは二人であったと回顧している。⁽²³⁾ 『金峯山寺史』に、鷺尾の訪問は「大正八年ころ」とある。もしこの回顧が正しければ、秋山大は父の死去からすぐに宗教研究に勤しみ、鷺尾に師事していたことになる。この点については、今後新たな資料が見出されることを期待したい。

第三に、宗教美術に関する図録の編輯事業への参画である。一つは、先述した鷺尾が中心となって刊行された『国文東方仏教叢書』である。昭和二年（一九二七）五月からは第二輯の刊行も始まり、秋山大は第九巻の図像部上の「解説」を加藤泰と共に担当した。⁽²⁴⁾ もう一つが、大鳳閣書房から刊行された『国宝美術集大成』である。この刊行経緯は不明であるが、美術評論家の笹川臨風が中心となつて進められた出版事業と思われる。秋山大は第二巻（平安時代・

上)、第七卷(室町時代・上)、第一一卷(支那朝鮮・上)の編輯を担当し、解題の一部を執筆している。⁽²⁵⁾なお、これらの図録で執筆した解題のいくつかは、のちに著書『古代発見』に再録されている。

以上のように、秋山大が入所前から宗教美術の研究に取り組み、鷺尾や笹川等の教授を受けて、各種の図録編輯に携わるなど、一定の研究成果を挙げていたことが、今回明らかになった。こうした実績が、秋山大が入所するに至った要因の一つであったと思われる。

(三) 研究所入所の背景

沿革史資料には、自薦他薦を問わず、研究所への入所を希望する書簡が多数存在する。しかし秋山大に関する紹介状などはなく、入所に至った経緯は現時点では不明である。彼の恩師・鷺尾順敬による推荐があったとも考えられるが、今のところ、確たる資料は見当たらない。⁽²⁶⁾ただ、本研究所に現存する秋山大の三枚の名刺のうち、ペンで「七月廿五日来訪」と書き込みされたものが一枚あることから、入所前に研究所を訪問した、あるいは大倉邦彦と面会していたことは間違いない。

こうした中で注目すべき資料が、「海軍大佐 富田貴一」と印刷された一枚の名刺である。⁽²⁷⁾この表面に、墨筆で「先般申上げし秋山大氏を御紹介申上候。何分宜しく御願申上候。共に参上致すべき所、宮古に参り失礼仕候。大倉邦彦様」と記されている。秋山大本人がこの名刺を持参して来所したと推測される。富田は兵庫県出身の海軍軍人で、明治四三年(一九一〇)に海軍兵学校(三八期)を、大正十一年(一九二二)に海軍大学校(甲種二〇期)を卒業した。⁽²⁸⁾その後、給糧艦「間宮」や軽巡洋艦「由良」の艦長などを歴任し、昭和十五年(一九四〇)四月二三日に死去した。⁽²⁹⁾富田と大倉、あるいは本研究所との関係は今のところ不明で、名刺にある「先般」がどのような機会であったかは特



【図②】高松宮宣仁親王奉迎後の集合写真（昭和15年5月30日）

定し得ない。したがって、富田と秋山大の関係、あるいは父・真之との接点などを調査していくことで、彼が入所するに至った経緯が明らかになるかもしれない。

二 研究所在職中の秋山大

（一）勤務形態

ここから、本研究所の沿革史資料を基に、研究所在職中の秋山大についてまとめていく。

秋山大は昭和八年（一九三三）八月に大倉精神文化研究所の嘱託として採用された。嘱託には研究嘱託と事務嘱託の二種があり、彼は退所するまで前者の身分にあった。

「大倉精神文化研究所規則」^①では、研究嘱託は次のように規定されている。

- 一、一定の期間を限って所長より研究を嘱託する者。
- 二、研究題目は本所に於て決定するものとす。
- 三、嘱託期間中、本所より講演、発表等を依頼することあるべし。

四、期間満了の際は研究の成果を論文にして本所に提出

すべし。該論文は本所に帰属す。

そして昭和一五年（一九四〇）一月に制定された「職員服務規程」⁽⁴²⁾で研究嘱託は、週一日以上出勤しなければならない第一種、週三日以上出勤しなければならない第二種、週五日以上出勤しなければならない第三種の三つに区分されている。

しかし沿革史資料を追っていくと、秋山大はこの三つの勤務形態のいずれでもなく、但し書きに「特別の事情あるものは所長の許可を得て之を変更することを得」とある特例の立場にあったと推測される。例えば、「（大日本精神史）編修室日記」⁽⁴³⁾昭和一六年（一九四一）三月二十四日条に「二十八日（金）研究協議会のある旨通知「秋山大殿へ」、あるいは同年四月二十四日条に「秋山研究員宛、二十六日の研究協議会開催の旨通知」とあるように、研究会の開催要綱や日程変更など、研究所の事務連絡が葉書などを通じて行なわれていたことが確認できる。また研究部員は「研究と並行して常に実践的一面を有すべし」として所務の一部を担当することになっていた。実際、研究部員たちが宿直や修養会の運営などを担当していたことは、宿直日誌などの沿革史資料から確認できる。しかし管見の限りでは、ここに秋山大の名前を見出すことはできない。したがって、秋山大は研究所での通常業務には関わらず、研究会や重要な行事が行なわれる時だけ来所していたのであろう。

ここで、その一例を紹介しておきたい。昭和一五年（一九四〇）五月三〇日、高松宮宣仁親王が大倉精神文化研究所を視察するため訪問した。当日、大倉は研究所や富士見幼稚園、学生寮などの関係者を集めて、親王ら一行を迎えた。そして親王が館内などの視察を終えて帰途に就いた後、本館正面で参加者一同による記念写真の撮影が行なわれた。これが、前頁の写真（図②）である。中央に立っている背広服の男性が大倉邦彦で、その後列の左から三番目に立っている和服姿の男性が秋山大であると推定される。本研究の沿革史資料に現存する写真のうち、彼の姿が確か

められるものは少なく、貴重な一枚である。

(二) 研究活動

今回の資料調査によって、秋山大の研究活動の一端が判明したので、左に掲げたい。

まず秋山大が提出した研究題目と報告書から、次のような研究テーマに取り組んでいたことが確認できた。

昭和 八年（一九三三） 「宗教芸術及びその特質に関する史的研究」⁽³⁵⁾

昭和一〇年（一九三五） 「上代の靈魂觀念に就きて―特に御霊代としての形示に關して」「天狗道の思想に就き

て―特に天狗草子絵巻に關して」「厳島平家納経に就きて」「仏師運慶伝に就きて」「能楽の構想に就きて―特に憑霊現象を扱ひたるものに関して」⁽³⁶⁾

昭和一一年（一九三六） 「怨霊崇拜とその祭祀に就きて―特に北野天神縁起に關して」「西行法師伝に就きて」⁽³⁷⁾

昭和一五年（一九四〇） 「明治初期の宗教政策」⁽³⁸⁾

昭和一六年（一九四一） 「精神的展開としての我が国歴史叙述形態の変遷―特に明治維新の政治理念の、大化改新及び建武中興との内在的關聯に求むるに、史書撰述の事実の上に徴せんとするを目的となす」⁽³⁹⁾

また当研究所主催の各種研究会で発表を行なっており、現段階で明らかになっている日付・研究会名・題目は、左の通りである。

① 昭和 九年（一九三四） 二月二五日 日本文化講読会「日本宗教芸術」⁽⁴⁰⁾

② 昭和一一年（一九三六） 九月一〇日 日本仏教研究会「春日本地信仰と春日曼陀羅図様に就て」⁽⁴¹⁾

- ③ 九月二九日 研究発表会「日本宗教芸術について」⁽⁴²⁾
 - ④ 昭和十二年（一九三七） 四月 一日 日本仏教研究会「西行法師の伝記」⁽⁴³⁾
 - ⑤ 昭和十三年（一九三八） 五月二七日 第一回公開学術講演会「現世信仰としての薬師像造立に就いて」⁽⁴⁴⁾
 - ⑥ 昭和十五年（一九四〇） 二月 三日 大日本精神史研究協議会「日本精神史の課題」⁽⁴⁵⁾
 - ⑦ 昭和一七年（一九四二） 三月二三日 大日本精神史研究協議会「吾が国歴史叙述の形態」⁽⁴⁶⁾
 - ⑧ 二月一二日 大日本精神史研究協議会「践祚と神器の継承」⁽⁴⁷⁾
 - ⑨ 昭和一八年（一九四三） 九月 一八日 大日本精神史研究協議会「身辺材料による明治史談」⁽⁴⁸⁾
- そして現時点で確認できている研究成果として、秋山大が本研究所に提出した論文・報告書、あるいは外部に発表した著書・論文等は、次の通りである。

- ① 昭和十一年（一九三六） 三月 一日 「戦国小話」⁽⁴⁹⁾（『躬行』二五（躬行会）所収）。
- ② 昭和十二年（一九三七） 八月 「宗教芸術の問題」⁽⁵⁰⁾（『朝鮮公論』二五（八）（朝鮮公論社）所収）。
- ③ 昭和十五年（一九四〇） 六月 「現世信仰の表現としての薬師造像―日本仏教信仰の原初形態に関する史的研究―」（大倉精神文化研究所）
- ④ 一〇月一五日 「『行の教育』に関して―特に「能」のことを」⁽⁵¹⁾（自筆原稿）
- ⑤ 一月 「靈魂の文学―源氏物語に就て―」⁽⁵²⁾（『國學院雜誌』四六（一一）所収）
- ⑥ 昭和十六年（一九四二） 四月二六日 「日本精神史の課題五」⁽⁵³⁾（自筆原稿）。
- ⑦ 一月 「筆ののびすぎ」⁽⁵⁴⁾（『畫說…月刊美術史研究雜誌』五九（東京美術研究所）所収）

⑧ 昭和一七年（一九四二） 六月 「光悦のたらしこみ」〔書説…月刊美術史研究雑誌〕六六所収

⑨ 二月二六日 「我が国の歴史叙述の形態」〔大倉邦彦先生献呈論文集編纂委員会編

『大倉先生献呈論文集国史論纂』〔躬行会 所収〕

⑩ 昭和一八年（一九四三） 四月一七日 「御践祚と神器御継承に關して（二）」〔自筆原稿〕。

⑪ 九月三〇日 『古代発見』〔道統社〕

⑫ 一〇月二日 「明治史談概要」〔自筆原稿〕。

⑬ 一〇月二五日 「我が国上代の生死観」〔西田長男編『日本精神と生死観』〔有精堂出版部〕所収〕

⑭ 年月日不明 「我が国固有の系図観念」に關して」〔自筆原稿〕

これらの一覧を見てみると、当初は「宗教芸術」を中心とした研究に従事していたが、昭和一五年度から大日本精神史の編纂事業が始まると、それに付随した研究に取り組むようになったことが確認できる。

（三）沿革史資料から見る秋山大とその周辺

次に、各種資料からうかがえる秋山大の人となり、そして大倉との関係について紹介したい。

第一に、秋山大の画才である。『秋山真之』に、次のような記述がある。

絵が堪能な將軍〔秋山真之〕は、子供にはよく絵を描いてやった。それが多く馬の絵であった。そして子供にも絵を描くことを勧めた。その練習の手本だといふので、將軍は一時絵葉書の蒐集に非常に凝ったことがある。⁽⁶¹⁾

こうした父・真之の影響もあったのであろう、秋山大も絵を嗜んでいたようである。



【図③】大倉邦彦宛秋山大年賀状
(昭和11年)



【図④】秋山大自筆の臨模図
(『古代発見』より転載)

図③は、昭和十一年（一九三六）に大倉邦彦宛に送った年賀状である。子年にちなんで、危機に陥った大國主神をネズミが救ったという『古事記』の一場面を描いたものである。この他にも、絵が描かれた秋山大の年賀状が残っている。また宗教美術の研究を進めていく上で、対象物を正確に捉えるために臨模も行なっていたらしく、図④は著書『古代発見』の挿絵の一つである。題材は、先述した外祖父の稲生が所蔵していた宝鏡に刻まれていた蔵王権現である。同書には、この他にも秋山大が描いた仏像などの挿絵が多数収録されている。いずれも非常に細かな線で丁寧な描かれており、秋山大の性格が見て取れよう。

第二に、大倉精神文化研究所紀要の第二冊として刊行された、著書『現世信仰の表現としての薬師造像―日本仏教信仰の原初形態に関する史的研究―』である。本研究所では、昭和一四年度に研究各部の所員の研究業績を、研究指導者の校閲を経て「紀要」として刊行することを決定した。最初に刊行された紀要三冊のうち、秋山大の研究業績がその一冊として採択された。同書の跋に、秋山大は次のように記している。

冒頭の如くこの書を遙かに大和法隆寺薬師如来に供養するには鎌倉杉本観音寺に修法を請ひ、薬師・観音同坐の縁にまかせ聊か願意のしるしとした。恰もこの書が上梓される頃、亡父真之の二十三回の忌辰が廻つて来た。私の研究の動機が父の遺志に基くことを回顧して、さ、やかながらこの一書を纏め得たのを私は私かに喜びとするものである。

今回計らずもこの論文が本研究所紀要に採択を蒙つたについては、かゝる小専門的一題目が果して大倉所長の初一念と本研究所設立の趣旨とに適ふや否や、顧みて忤怩に堪へないが、私自身としてもそれに鑑みつゝ、勉めて努力したつもりである。しかし至らずして論旨その他に不適當のものがあつたならば、それは全く私一個の責任である。本研究所が多年に互り私の貧しき研究に対して補助を惜しまれなかつたのを銘記し、こゝに甚深の謝意を表したいと思ふ。⁽⁶⁶⁾

同書が刊行された昭和十五年（一九四〇）は、父・真之の二三回忌であつた。したがって、秋山大にとってこの書籍は、それまでの研究成果の集大成でもあり、また研究の道へと導いてくれた亡父への成果報告書でもあつた。そうした秋山大の思いがうかがえる書簡が三通現存している。本来、紀要は昭和一四年度中に刊行されるはずであつた。しかし用紙の都合で難しくなり、刊行は次年度に繰り越したとなつた。こうした延期の事情が正確に伝わってゐなかつたのであろう、刊行の先行きに不安を感じた秋山大は、昭和一四年（一九三九）十二月二〇日、大倉に次のように問い合わせている。⁽⁶⁷⁾

先般紀要御発行の御趣なりしも、其後御模様更へ或は中止せしめらるゝやう及拝承候得共、果して御都合如何に可相成哉。実は最近某書肆より小生迄編著出版申出で候向有之候間、先に提出仕候拙論御用に相適はざるやう相成し時は御返戻を蒙り、其方の求めに応じ、改めて御補助による旨明記して発刊致度く存罷在候。但し鈴木（宗



【図⑤】大倉邦彦宛秋山大書簡（昭和15年2月5日）

忠^{たけ}）先生の御審査にも預り候故、同先生の御了解の上ならでは如何かと被存候間、其点何分之御決裁伏而仰度奉存候。

秋山大が他の出版社に廻してまで早く刊行しようと考えたのには、然るべき理由があった。続けて書簡にはこう記されている。

茲に聊か微意を差加ふるを御許し被下ならば、明年二月は亡父二十三回忌に相当致し、亡父旧友間に何か記念事業の試みあるやに聞及居候。小生も願くば其機会に自著一卷相繼め霊前に供するを得者、子としての本懐不過之との存念に御座候。秋山大は命日である二月四日に行われる「亡父二十三回忌」で、霊前の供物として

「自著」を供えたいと、強く願っていたのである。これに対する大倉の返信は不明であるが、同年一二月二六日付の秋山大書簡に「拙論御用に適ふを得者本懐至極に御座候」とあるので、すぐに刊行計画に変更がないことが通知されたと推定される。

図⑤の秋山大書簡⁽⁴⁹⁾は法要のことを大倉に報告したもので、

昨四日亡父法要に際して、小論上梓の運びに相成候を霊前に報告致し校正刷を以て供養致候段、まことに本懐の至りに不堪存候。之偏へに御高庇基く所似と御厚情深く銘記し、乍憚以書中御礼の御挨拶のみ申上度如此御座候。

とある。秋山大にとって、父・真之の存在が如何に大きいものであったかが知られる資料である。

第三に、大倉邦彦との関係である。後に詳述するが、秋山大は昭和一八年（一九四

三) 一〇月退所する。今回の資料調査によって、秋山大がそれまでに二回辞職願を提出していたことが明らかとなった。一度目は、入所して約八ヶ月後の昭和九年(一九三四)四月三日である。^⑩少々長文になるが、左に全文を掲げる。天運にまかせ結縁有之先生の知遇を蒙り、小生浅学にかゝらず研究所の一員として列し、殊に厚情を忝うして非才を顧みず精神事業の一端に参与するに至りしは、甚だ感謝に堪えざるところに御座候。微力以て研究の実を挙げ薄志以て学問の功を致し、聊か報ゆる道あらんかと心中期するもの有之候処、偶々同僚間に不和の事あり。稍もすれば友情にもとり信誼に反するの観なき不能候。蓋しその源は遠くその根は深く、一朝の弥縫によりて整ふべきものに非ず。寧ろ此際後進の為大いに改革すべきものあるを痛観致候。而も傍に居て施すところを知らず。この事を致せし小生が不明、甚だ慚愧無極候。かくては終に学修め難く徳成り難く、何として道を行すべきにや。将来の危惧まことに慚しとせず候。茲に觀じ来り思ひ至れば、又小生が父祖の遺志没するにちかく、報国の素願捨つるに似て、全くしのび難きもの有之候。よつて身を退き山を去り、再び小生が書齋に帰室するにしかじと存候。自今以後外部にあつて業を遂げ他日功を成さんを誓ひ、これを以て又先生の知遇厚情に報ゆる由縁と致度所存に御座候。こゝに甚だ突然乍ら辞意を表明し、先生の寛恕を乞ふものに御座候。

そして「昭和九年春四月七日釈尊降誕会の前日」という日付と、左の和歌二首を記した別紙も同封されていた。

袂別に際し聊か所懷を和歌二首に托す

ゆく水によどむ心のにこりあらばかげうつさへうかりかりけり

いざ、らばわかれゆくべき道なれど末は一つにたどりべかまし

ここにある「同僚間に不和の事」の具体的な内容がどのようなことであったかは、現時点では詳らかにし得ない。しかし秋山大が「心のにこり」と表現しているように、所内の人間関係に嫌気が差したのであらう。大倉の「知遇厚

情」を感じつつも、このままでは「父祖の遺志没するにちかく、報国の素願捨つるに似て」と思い、本研究所を去ろうとしたのである。これに対する大倉、または研究所の反応を知る資料は見当たらないが、秋山大がそのまま研究嘱託として残っていることから、この辞職願は受理されなかったであろう。

二度目は、昭和十一年（一九三六）二月一日である。⁷¹秋山大は「貴所規約に依り所定の期間を経過せる」を理由として辞職願を提出している。これに対しては、大倉邦彦の名義で、「予定の期間一応満了と相成候得共、日本仏教研究の方は未だ継続中に候へば、貴台の御研究期間も此際更新、猶ほ従前通り御継続被下度候」という返信が送られており、二度目の辞職願も受理されていない。

規則上、研究嘱託の任免権は所長である大倉の専権事項である。その大倉が二度にわたって秋山大の辞職願を退けたことは、先述したように彼の勤務形態が特例であったことも踏まえると、その才能を非常に高く評価していたことを示している。

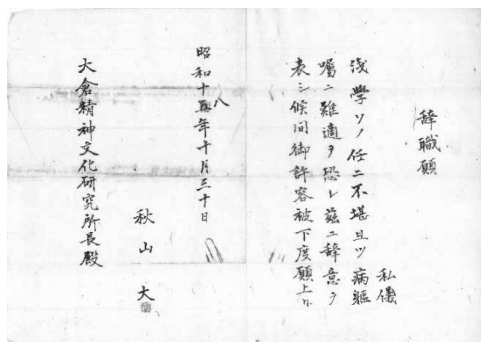
（四）研究所辞職の背景

昭和十八年（一九四三）一〇月三〇日、秋山大は三度目の辞職願を提出した⁷²

（図6）

辞職願

私儀、浅学その任に不堪、且つ病軀嘱に難適を恐れ、茲に辞意を表し候間御許容被下度願上候。



【図6】秋山大辞職願（昭和18年10月30日）

昭和十八年十月三十日

秋山大^⑧

大倉精神文化研究所長殿

大倉はこれを受理し、同日左のように返信している。^⑦

昭和拾八年拾月卅日

財団法人 大倉精神文化研究所 大倉邦彦

秋山大殿

拝啓 益御清穆之段奉賀上候。陳者本日付を御提出相成候御辞表、正に受理致候。多年に亘り本所研究の爲め御尽力を忝う致候段、茲に更めて厚く御礼申上候。尚ほ今後御仕事も御完成相成候暁には、又更めて本所の研究に御参加を得度存居候。先は右以書中御挨拶迄如斯御座候。敬具

この年一〇月二一日の理事会において、大日本精神史の編修事業に集中するため、「囑託制を廃して専属の研究員のみにて編修長中心に陣容を建直す事」が決定し、多くの研究囑託に解囑通知が送付されている。^⑧従来とは異なり、三度目の辞職願が受理されたのは、こうした状況下であったことも一因であろう。

しかしこの往復書簡を引き合わせると、秋山大は「浅学」「病軀」を辞職の理由に挙げているのに対して、大倉は「御仕事」が完遂した後に復帰するよう求めていることに気付く。したがって、秋山大が辞職を願った背景には、ある「御仕事」に専念したいという秋山大の意向があり、二人の間でそれが共有されていた可能性が考えられる。

いくつかの周辺資料から、この「御仕事」とは、秋山大の師・鷺尾順敬が遺した仕事であったと推測される。鷺尾の門弟の一人である渡辺三男が、次のように回想している。

私は、鷺尾先生の指導を受けて卒業論文を書きあげ、卒業後一年有余、(日露海戦のときの先任参謀秋山真之

の長男）秋山大等とともに、鷺尾先生編纂の『日本仏家人名辞典⁽¹⁴⁾』増訂版のお手伝いをした。

お宅でいただいた夕食の後では、いつも、先生の思出話をうかがうのが楽しみであった。本願寺の寺侍だったご生家のこと、村上專精・河口慧海ほかの明治の学匠のこと、永年お勤めになった史料編纂所第八部の主任として寺社・旧家の秘庫を渉猟された古文書のことなど、私が今日老書生として生きているについては、先生の薫化に負うところが大きかった。⁽¹⁵⁾

渡辺は駒澤大学を昭和八年度に卒業しているので、これは昭和九年（一九三四）か昭和一〇年（一九三五）の出来事である。鷺尾は明治三六年（一九〇三）一〇月に編纂刊行した『日本仏家人名辞書』の改訂増補を企て、昭和六年（一九三一）頃から着手した。秋山大が特例の勤務形態であったことは先述した通りであるが、おそらくこうした鷺尾を中心とした編輯事業に参加していたからであろう。門弟たちの協力を得て、原稿はほぼ完成の域まで達していたが、昭和一六年（一九四二）二月二三日、鷺尾は病のため死去してしまう。そこで門弟たちは、鷺尾の号を用いて「藍山会」を結成し、改訂増補版の刊行、遺稿の編纂などに取り組むこととした。秋山大もこの会員に名を連ねている。⁽¹⁶⁾秋山大が藍山会の業務に専念したい、とりわけ恩師の悲願であった改訂増補版を刊行させたいと切望したことは想像に難くない。したがって、たびたび慰留していた大倉が三度目の辞職願を受理したのは、研究所の新しい運営方針もあったかもしれないが、一方では秋山大の学恩に報いたいという心情を汲み取ったからとも考えられるのである。ともあれ、昭和一八年一〇月に秋山大は大倉精神文化研究所から去ったのであった。

おわりに

秋山のその後についてはほとんど不明である。沿革史資料のうち、秋山大が退所した以降の関係資料は、昭和一九

年（一九四四）三月二三日付の大倉精神文化研究所宛書簡のみである。内容は研究所紀要二冊を贈呈されたことに對する御礼で、彼の動向を伝えるものではない。

秋山大が専念したであろう藍山会は、既刊の『日本禪宗史の研究』を『藍山全集』の第一巻として再刊したにとどまっておき、十分な成果をあげたとは言いがたい。何よりも恩師の悲願であった『日本仏家人名辞書』の改訂増補は、結局、実現しなかった。否、できなかったというのが正しい。原稿が空襲によってすべて灰燼に帰してしまったからである。同会の事業に多大な時間と労力を費やした秋山大の落胆は非常に大きく、さらに敗戦の事実は更なる精神的な負担となったようである。冒頭に紹介した西田長男は、論文「妣の国・孀の国―推古期美術の民族宗教的モチーフ―」の最後で、秋山大の晩年の様子を次のように記している。

君の父はかの真之提督であり、伯父に好古將軍がおられた。その関係から、ことに敗戦の打撃は深刻であつたと思われる。かの戦時中は、生涯独身を通したほどのたださえ弱い身体で、その先師鷲尾順敬博士の遺囑に應えるため、『仏家人名大事典』の編纂というような身体を消耗する事業を主宰し、しかもその苦心になった労作を戦火で烏有に帰してしまい、また、配給以外はあえて口にしないような人であつたので、栄養失調にもなつていったということであるが、そうしたいろいろの原因が重なつて、終戦後間もなくすぐれた才能を持ちながら短命で死んだ。君の亡き後、逗子の家にお母様をなぐさめに訪れたとき、庭に海軍大学校から戻され来た父提督の銅像が置かれてあるのを見て、わが国の運命を思いつつ、しばし感慨無量なものがあつた。このときお母様は君は餓死したのだといわれた。わたくしはそこに深い憤りを見たのである。秋山家の明治における功業は、今、昭和の軍閥・官僚によって一瞬にして無にせられ、しかのみならず、一人の読書生たる君をも餓死せしめねばならなかつた。君が最後にいった「軍閥の子が軍閥のために殺されるのだ」との言葉をわたくしは忘れることができない

いのである。⁽⁸⁰⁾

昭和二十一年（一九四六）十一月二十四日、秋山大は大倉精神文化研究所に再び戻ることなく、不歸の客となった。享年四〇。現在、父・真之や弟妹たちと共に、鎌倉靈園にある秋山家の墓に眠っている。

以上、本稿では、秋山大の経歴や大倉精神文化研究所との関係などについて、新たに明らかとなった事柄を整理してきた。最後に今後の課題を二点挙げておきたい。一つは、更なる資料調査の必要性である。入所の経緯など、まだ不明瞭な点も多い。秋山大だけではなく、周辺人物の資料を追っていくことも必要であろう。

もう一つの課題は、秋山大の論文等の内容分析である。彼は日本仏教美術史を専攻したが、それは「宗教の芸術化の事実と、芸術性自体が宗教へと上昇する系路、即ち芸術の宗教化の真相とを、我各時代の宗教関係の造形美術」から検討し、そこから各時代の「宗教意識」「文化意識」の特徴を詳らかにすると共に、その内部を貫いている「日本精神」を見出そうという試みであった。⁽⁸¹⁾これは、秋山大が「過去で生きていたものと、現在で生きているものが一つでなければ歴史ではない」と述べているように、彼自身の問題意識から導き出されたテーマであり、その背景には父・真之の「宗教に依る人格の確立と、社会の救済」という遺論があったに相違ない。したがって秋山大の業績を分析することは、各研究史における彼個人の評価を定めるだけではなく、秋山父子の精神史の真相を明らかにすることに繋がっていくであろう。今後、宗教学や日本思想史などの専門分野からも、アプローチが進められることを期待したい。

(1) 西田長男「第二卷 古代編(上) のために」(『日本神道史研究』第二卷古代編(上)(講談社、昭和五三年) 五一―六頁)。本稿で引用した西田長男の秋山大に関する文章は、三橋健氏からご教示を賜った。ここに記して謝意を表する。西田長男については、本論集に収録されている三橋健「松下幸之助と神道大系の編纂」も参照されたい。

(2) 『楽・遊・学』平成二二年一二月号、のちに平井誠二・林宏美著、『わがまち港北』出版グループ編『わがまち港北2』(『わがまち港北』出版グループ、平成二六年四月) に収録。

(3) 田中宏巳『秋山真之』(吉川弘文館、平成一六年) 三七頁。なお、田中と同様、司馬遼太郎も「大は成人後、無宗派の僧としてすごした」(『坂の上の雲』第六卷、昭和四七年、文藝春秋、二八二頁) と、秋山大が僧侶となったとしている。しかし今回の調査では、それを裏付ける資料は見い出せなかった。この点は、今後の課題の一つである。

(4) 今回の調査申請の際、秋山真之会編『秋山真之』(秋山真之会、昭和八年) の口絵に、秋山真之遺族の写真(図①) が掲載されていることを、坂の上の雲ミュージアムからご教示を賜った。記して謝意を表する。

(5) 前掲注4『秋山真之』三七三頁。

(6) 前掲注4『秋山真之』一一頁。

(7) 前掲注4『秋山真之』三九二―三九三頁。これに続けて、秋山大は「しかし世間が誤解してゐるやうに大本教といふやうな一個の宗教にかぶれて毒せられたといふ事はない筈です。父が宗教に対する態度は結局に於て批判的でした。世間では何と評さうと、父の宗教に対する思想には一貫した条理がありました。その条理には大した矛盾があるとも思はず、私達父に導かれたまゝ、に信じてゐます。」と語っている。彼は父・真之の宗教活動に対する世評に強い違和感を覚えていたらしい。昭和一四年(一九三九) 一月二三日、秋山大は伝記『秋山真之』の改訂に当たっていた水野広徳を訪ね、関係資料を見せながら、真之の「信仰関係並ニ思想傾向等」を話し、これを改めようとしている。しかし水野の感想は、「種々手紙ヲ見ル。真相判シ難キモ精神ニ異常アリタリヲ疑ハズ(或ハ一時的カモ知レストハ云ヘ)」であった(『水野広徳日記』同日条、『水野広徳著作集』第七卷、雄山閣出版、平成七年)。

- (8) 前掲注4 『秋山真之』三七二頁。
- (9) 前掲注4 『秋山真之』二八一頁。
- (10) 秋山大之母すゑは、稲生真履の三女。「デジタル版 日本人名大辞典+」²⁵⁾には、稲生は「明治―大正時代の官吏。天保一四年生まれ。宮内省に四八年間つとめる。東京帝室博物館（現東京国立博物館）の学芸委員として刀剣などの古美術に精通した。大正一四年二月一日死去。八三歳。」とある。
- (11) 西川明彦「『正倉院宝物関連資料紹介』東京国立博物館所蔵木漆工模造品」（宮内庁正倉院事務所編『正倉院紀要』三一、平成二二年）七九頁。同「『正倉院宝物関連資料紹介』東京国立博物館所蔵金工・刀剣模造品」（『正倉院紀要』三三、平成二三年）四九―五〇頁。
- (12) 岡塚章子「『近畿宝物調査写真』について」（文化財保護委員会監修『月刊文化財』五一七、平成一八年）三八頁。
- (13) 前掲注4 『秋山真之』四〇五―四〇七頁。
- (14) 例えば、前掲注11の西川論文「東京国立博物館所蔵金工・刀剣模造品」にある「金銀莊大刀」に関する逸話が、秋山大『古代発見』（道統社、昭和一八年）の「筌篋遺響」で言及されている（三一―三三頁）。
- (15) 光山覚音編『曹洞宗大学一覽 大正一〇年度』（曹洞宗大学、大正一〇年）五五―一八二頁。
- (16) 『駒澤大学学報 昭和一五年度』第一輯（駒澤大学、昭和一六年）五七五―六一九頁。
- (17) 『現代仏教』第三卷第二号（大雄閣、大正一五年）七一―七八頁。
- (18) 統群書類従完成会編『温古随筆』第一二二号（統群書類従完成会、昭和四年）一三八―一四二頁。
- (19) 「藍山鷺尾順敬伝」（鷺尾順敬「鎌倉武士と禅」（大東出版社、昭和一七年）収録、「鷺尾順敬博士伝歴」（鷺尾順敬編集『増訂新装版 日本仏家人名辞書』（東京美術、昭和四九年）収録）など参照。
- (20) 鷺尾順敬編纂『国文東方仏教叢書』第一輯第一〇卷・文藝部下（国文東方仏教叢書刊行会、大正一五年）。
- (21) 残りの一面は大阪の個人が、もう一面は美術学校（現 東京藝術大学）が所蔵していたという（村上專精等編『明治維新神仏分離史料』下巻（東方書院、昭和二年）一〇三頁）。現在、東京藝術大学美術館が所蔵する「蔵王権現鏡像」（物品番

号一五五四）が、後者のものと思われる。

(22) 以上の記述は、首藤善樹『金峯山寺史』（金峯山寺、平成一六年）二三九―二四〇頁、二六〇―二六一頁による。

(23) 秋山大「金峯宝鏡還山縁起」前掲注14『古代発見』二七九―三〇一頁。

(24) 鷺尾順敬編纂『国文東方仏教叢書』第二輯第九卷・圖像部上（国文東方仏教叢書刊行会、昭和八年）。この書籍は予約会員限定の頒布であったが、購入を希望する者が多く出たため、東方書院から『日本仏教図像選』上巻と改題して、一般販売もされている（発行の言葉）。なお、大倉精神文化研究所附属図書館の所蔵本は、秋山大による寄贈本である。墨筆で、一頁目のタイトルが「解説」となっているのを「図像」と修正し、二頁目の解題に若干の加筆が施されている。

(25) 大鳳閣書房編『国宝美術集大成』第二巻は昭和七年（一九三二）二月、第七巻は昭和七年一月、第一巻は昭和八年一月に刊行された。なお「奈良時代」と想定される第一巻と「支那・朝鮮下」と想定される第二巻は、各公共・大学図書館や研究機関に現存していない。おそらくこの出版事業は、未完となったのであろう。

(26) 本研究所の沿革史資料のうち、鷺尾順敬に関する資料は以下の通り。①昭和十三年二月付、鷺尾順敬博士教学功績記念会案内書（沿革史資料八二一―三六）、②昭和十四年一月一日付、躬行会宛年賀状（沿革史資料六八四〇「鷺尾順敬葉書」）、③昭和十五年一月一日付、大倉邦彦宛年賀状（沿革史資料六九八二六「鷺尾順敬葉書」）、④名刺（沿革史資料一二二四七「名刺ファイル」四六四）。

(27) 名刺「秋山大」①沿革史資料一二二四九「名刺ファイル三」一三八、②沿革史資料一二二四九「名刺ファイル三」二九一、③沿革史資料一二二五〇「名刺ファイル四」四七九。書込があるのは②の名刺で、裏面に印刷されている住所は「東京市品川区上大崎中丸四一四」となっている。昭和一〇年（一九三五）の大倉宛秋山大年賀状（沿革史資料六〇四一三）で、印刷されている右の住所をペンで「神奈川県逗子仲町七〇三」と修正している。したがって、秋山大は昭和九年末に転居したと想定されるため、②の名刺は研究所入所前のものである。

(28) 名刺「海軍大佐 富田貴一」（沿革史資料一二二五一「名刺ファイル五」三九六）。

(29) 海軍義済会編、戸高一成監修『日本海軍士官総覧―財団法人海軍義済会編海軍義済会員名簿（昭和一七年七月一日調）』（柏

書房、平成一五年）二〇三頁など参照。

- (30) 本研究所に現存する名刺以外の関係資料は、昭和一〇年一月一日付の大倉邦彦宛年賀状一通のみで（沿革史資料六一三六二「富田貴一葉書」、住所は「大連市千草町二三」となっている。

- (31) 沿革史資料六六九〇「大倉精神文化研究所規則」。制定時期は不明。

- (32) 沿革史資料六六九〇「職員職務規程」。

- (33) 沿革史資料五七七五「大日本精神史」編修室日記 昭和一六年―。

- (34) 沿革史資料六九三六「写真」集録②。

- (35) 沿革史資料五七六二「研究員・研究題目等」。沿革史資料六三五「大日本精神史」には「日本仏教研究を囑託」と記されている。

- (36) 沿革史資料二九九七一「秋山大書簡」。

- (37) 沿革史資料三一一九六「秋山大書簡」。

- (38) 沿革史資料五二五二「大日本精神史大綱方針編修諸記録」。

- (39) 沿革史資料六〇八一「各部研究調査報告書（大日本精神史）」。

- (40) 沿革史資料四七三「（昭和九年）一月中日程表・二月中日程表」。沿革史資料一四七三「（大倉精神文化研究所・大倉邦彦先生教育事業関係書類）」。

- (41) 沿革史資料六四一八「報告書綴昭和一一年八月―十二月」。

- (42) 沿革史資料二六三一「研究室記事」。

- (43) 沿革史資料二九七「皇紀二五九七年―二月事業報告（昭和一二年）」。沿革史資料二四九七「日誌」。沿革史資料六四一九「報告書綴・昭和一二年一月―五月」。

- (44) 沿革史資料二一八「皇紀二五九九年度版使命事業（昭和一四年度）」。沿革史資料一三五五「昭和一二年度ヨリ昭和一五年度マデ行事表」。沿革史資料五八四二「仏教講演会（聴講申込書、日本精神講習会出席者名簿・案内、學術講演会案内等）」。

- (45) 沿革史資料三〇二「昭和一五年度事業報告」。沿革史資料五一三「昭和一五年一二月行事表」。沿革史資料二六二「報告書綴」。
- (46) 沿革史資料三〇三「昭和一六年度事業報告」。沿革史資料五七七五「編修室日誌一六年」。沿革史資料五九三九「大日本精神史編纂関係・事務日誌」。
- (47) 沿革史資料三〇三「昭和一六年度事業報告」。沿革史資料六九〇「(大日本精神史)編修室月報」。沿革史資料五九三九「大日本精神史編纂関係・事務日誌」。沿革史資料六〇八一「各部研究調査報告書(大日本精神史)」。
- (48) 沿革史資料三〇七「昭和一八年度事業報告」。沿革史資料五七七六「編修部回覧書類」。沿革史資料五九三九「大日本精神史編纂関係・事務日誌」。
- (49) 無署名であるが、沿革史資料三〇二六四「可知博一宛秋山大書簡」によって、秋山大が執筆したことが確認できる。『躬行』に収録された文章には、秋山大が執筆したものがこの他にもあると思われる。
- (50) のちに前掲注14『古代発見』に再収録されている。
- (51) 沿革史資料三六二九。のちに前掲注14『古代発見』に再収録されている。
- (52) のちに前掲注14『古代発見』に再収録されている。
- (53) 沿革史資料六〇八三「研究員報告論文集」。
- (54) のちに前掲注14『古代発見』に再収録されている。
- (55) のちに前掲注14『古代発見』に再収録されている。
- (56) のちに前掲注14『古代発見』に「歴史の形態」と改題して再収録されている。
- (57) 沿革史資料三六五四。
- (58) 沿革史資料五七六一「研究協議会・研究発表要旨(原稿)二」二〇。冒頭に「所外発表は差控へられたし(花押)」と書込あり。
- (59) のちに前掲注14『古代発見』に「太子応生の天寿国」と改題して再収録されている。
- (60) 沿革史資料三六二八。年月日の記述がないが、資料整理の状況から「昭和一五年」と推測される。

- (61) 前掲注4『秋山真之』三七二頁。
- (62) 沿革史資料六三三三二「秋山大葉書」。
- (63) 本研究所には、明王が描かれた昭和一〇年（一九三五）の年賀状が現存している（沿革史資料六〇四一三）。この他、佐賀県立図書館所蔵「塚原嘉一郎関係資料」に、昭和八年（一九三三）の年賀状を再利用した葉書があり、鶏と古代服を着た男性が描かれている（請求番号・図塚原〇〇二七）。塚原は伯父である秋山好古の娘婿。
- (64) 前掲注14『古代発見』二九九頁。
- (65) 他の二冊は、次の通り。原正男『日本道徳、日本宗教の観点より見たる垂加神道の庚申伝』。藤井信男『古事記に観る日向三代の精神』。
- (66) 秋山大『現世信仰の表現としての薬師造像―日本仏教信仰の原初形態に関する史的研究―』（大倉精神文化研究所、昭和一五年）三〇五頁。
- (67) 沿革史資料三四八九八「秋山大書簡」。
- (68) 沿革史資料三四九一八「秋山大書簡」。
- (69) 沿革史資料三五〇七五「秋山大書簡」。
- (70) 沿革史資料二七四二「秋山大書簡」。
- (71) 沿革史資料三一一九六「秋山大書簡」。
- (72) 沿革史資料五八八九「発信控 一 年度（写）二―一四八「大倉邦彦書簡」。
- (73) 沿革史資料一八六四「辞職願書類」。図⑥を見るとわかるように、年の「五」を朱筆で「八」と修正している。したがって、昭和一五年にも辞表を提出した、あるいは提出しようとしていた可能性がある。しかし現在のところ、それを確認できる沿革史資料は見当たらない。
- (74) 沿革史資料五八九三「発信控 一 八年度・二〇年二月～二一年二月（写）一―一五二「秋山大宛大倉邦彦書簡」。
- (75) 沿革史資料五八九三「発信控 一 八年度・二〇年二月～二一年二月（写）一―一五〇「西晋一郎宛大倉邦彦書簡」。この書簡

写にある対象者一覧には、秋山大の名前は記されていない。

(76) 渡辺三男「嵯峨天皇と最澄・空海(下)」(『駒澤國文』二九(駒澤大学文学部国文学研究室、平成四年)二〇頁。

(77) 前掲注16『駒澤大学学報昭和五年度』第一輯、五九六頁。渡辺は東洋学科卒業で、卒業論文の論題は「一条兼良の研究」。

(78) 「藍山鷲尾順敬伝」(前掲注19『鎌倉武士と禅』収録)二二六―二二九頁。ここに記されている他の会員は、稲村坦元、飯塚

文治郎、小笠原義雄、大久保道舟、喜多順輝、黒萩観龍、高橋梵仙、藤井草宣。

(79) 沿革史資料四〇四六二「秋山大書簡」。

(80) 西田長男「妣の国・孀の国―推古期美術の民族宗教的モチーフ」(前掲注1『日本神道史研究』収録、一五二頁)。

(81) 前掲注14『古代発見』二二三―二四頁。

(82) 前掲注14『古代発見』一〇頁。なお島田謹二『アメリカにおける秋山真之』(朝日新聞社、一九六九)の巻頭に、この文章が掲載されている。